

CLILを使った小学校英語活動実践 ——その効果と今後の課題について——

高木 徹* 中山 貴子**

Foreign Language Activities in Elementary School Using CLIL: Effects and Future Agenda

TAKAGI Toru NAKAYAMA Takako

要 約

平成28年度におけるA市立D小学校1年生から6年生を対象に行ったCLIL（内容言語統合型英語授業）を使った授業実践を報告する。文部科学省が新指導学習要領に向けて提示する「主体的・対話的で深い学びの実現」（アクティブ・ラーニング）¹⁾を踏まえ、全学年におけるCLIL（内容言語統合型英語授業）を使った授業を立案・実施した。実践授業で見えてきた児童への効果と今後の課題を検討する。

実践授業の結果、児童同士の意見交換やグループ活動での取り組み、発表の工夫など日常の英語活動とは違った活発さが見受けられた。高学年では異文化に対する意識や異文化接触を伴う体験的学習を取り入れたことによって、学習に前向きになり、主体的・対話的学びが生かされた授業が成立することを立証できた。一方、中学年・高学年児童に対しての深い学びを充実させるため、さらに綿密な指導プランの作成と授業時間数確保の必要性が今後の課題として残った。

キーワード：CLIL、内容言語統合型学習、実践授業、主体的・対話的学び

1. はじめに

平成13年、A市立B中学校区内、C小学校・D小学校・E小学校にて3年生から6年生までの外国語活動をスタートさせた。各学年年間10回の授業を担当と日本人英語講師（以下JT）で行うこの活動は、Let's Enjoy Englishの頭文字をとってLEE TIMEの名称で呼ばれ、現在に至っている。平成27年からの試みとして、上記3校で、6年生の日常英語活動の中に、社会科授業をCLIL（内容言語統合型英語授業、以下CLIL）活動として導入した。そ

の実績が評価され、平成28年度A市教育委員会「創造と活力のある学校づくりの推進」プログラムからの一部助成を受けることができたため、A市立D小学校においてLEE TIMEに加えて全学年でのCLIL活動をスタートさせた。

CLILとはContent and Language Integrated Learning（内容言語統合型英語授業）の略語で、教科学習と外国語学習を統合して行うヨーロッパを起源とする外国語指導法である。CLILの特徴である「4つのC」、Content（科目やトピック）、Communication（言語知識や言語スキル）、Cognition（思考力）、Community/Culture（共同学習・異文化や国際理解）で授業が構成されている²⁾。またCLILは、学校現場の実情に合わせた授業形態に修

* 中部大学現代教育学部現代教育学科

** 愛知淑徳大学(非常勤)

正できることも特徴の一つである³⁾。本実践では、科目内容に重点を置く Hard CLIL、学期に単発で行う Light CLIL (6年生のみ Heavy CLIL)、CLIL 的タスクを授業すべてに入れて行う Total CLIL、使用言語を英語・日本語とする Bilingual CLIL を各学年で行った⁴⁾。これらの授業形態を実施するにあたり、「4つのC」を基本として考えるだけでなく、児童が体験型学習の中で、自ら考え、動き、他者との関わりを大切にしながら学ぶことにも強く配慮した授業⁵⁾ を実践したので、その内容を紹介する。

2. CLIL 実践授業—効果と課題について

2-1. 1年生 算数 (2クラス: 24、25名) 「形をさがそう、形を使って絵をかいてみよう」

平成28年10月19日に1回目の授業として、3限目に第一クラス、4限目に第二クラスを授業し、27日に2回目の授業として、3限目に第一クラス、4限目に第二クラスの授業を実施した。どちらの授業も担任教師と Japanese teacher (以下JT) 中山によるティーム・ティーチングで行った。算数に必要な「形」として、triangle, square, circle, rectangle, diamond, heart, star をテーマに CLIL 授業を行った。正規の算数授業では「形」の理解を終了しており、児童たちは四角・長四角など日本語での名称を認識していた。

1回目の授業においては、第一の学習活動として、絵カードで形を導入した後、児童らは黒板に棒状マグネットや曲線マグネットを使って形づくりを行っ

た。triangle, square, diamond, rectangle は、二人一組で簡単に作ることができたが、Star は三人掛かりでも苦戦し、最後は何人かの児童も加わり作り上げた。曲線マグネットは heart circle の形づくりに使用。バランスが悪いとはがれてしまうが、男子児童が作成に苦戦する中、女子児童二人が工夫しながら完成させた。その際全員から「すごい!」「頑張ったね」「僕たちも頑張ったらできるね」と、拍手歓声が上がった。

第二の学習活動では、JT が英語で発音する「形」を、指で空に描く「空書き」を、まず何度も行った。さらに、CLIL 授業と一緒に参加する担任教師が声の大小で形の大きさを「空書き」させた。例えば、大きな声で Circle と叫ぶと大きな円形を、小さな声で Circle と発声すれば小さな円形を「空書き」することを意味した。また、ささやき声で Circle と言え、とても小さな円形を「空書き」することを意味した。それを聞いて、児童は相手の声の調子で、全身を使って形を表現するだけでなく、慣れてくると動作に続いて自然に言葉も発するようになっていった。

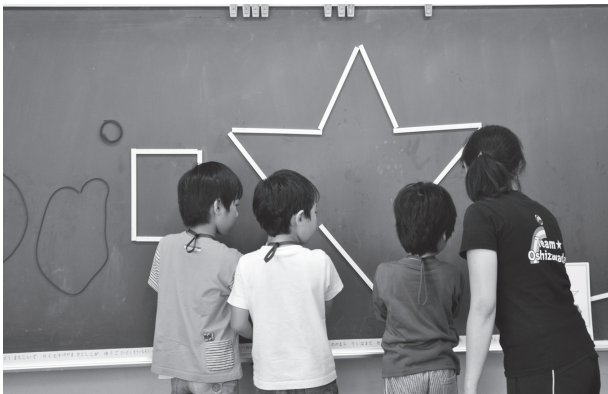
第三の学習活動として、JT の発音する「形」を当ててあてっこゲームや、「形」の手遊びチャントなど、「遊び」を通して行う学習言語の反復練習を十分に楽しんだ。最後に、授業の振り返りでは、児童の要望で「形」のDVDを3回視聴して終了した。

2回目の授業においては、まず前回視聴したDVDを全員で再度見ながら、その内容に合わせたワークシートを用いて、「形」の英語表現を復習した。次

1年生 CLIL 授業活動

授業回数	Content	Communication	Cognition	Community/Culture
第1回	算数 形を知って 形を探す。	学習言語 形の名前 What's this shape? 学習のための言語 Let's make ~. big/little/tiny	学習言語・色の名前を 様々な練習活動通して 知る。	児童同士で協力して形を作る。
第2回	算数 形を使って 絵を描く。	学習言語 形の名前 学習のための言語 Let's draw ~. What can you see? Guess what?	教室の中の形を探す。 形を使って絵を描いて みる。	教室にある形を見つけて紹介し あう。描いた絵をクラスで紹介 し、全員で何かを当てる。

に児童がペアになり、教室を歩き回りながら「形」探しを行った。つまり、各自で色々な「形」の絵を描き、それぞれの絵の「形」を英語で発表した。その際に児童がGuess, what? と質問し、何の絵かを当てさせた。この学習活動の始めでは、児童のほとんどが日本語で返答したが、JTがそれを英語に置き換えて発音を繰り返すと、次第に偶発的言葉として、英語で返答する児童が何人か現れ、それに追従する形で皆が英語で返答するようになった。最後は、児童の中で色々な「形」の英語と日本語表現の境界が無くなってきた。



2-2. 2年生 図画工作（2クラス:24、25名） 「色の組み合わせ・色水で調べてみよう」

平成28年11月4日3・4限目に第一クラス、11月11日3、4限目に第二クラスの授業を実施した。担任教師とJT中山によるティーム・ティーチングで行った。絵本紹介では当時の校長先生が加わった。

各クラスとも2時間1回目の授業として、続けて授業を行った。1時間目に、基本「色」red, yellow, blue, purple, orange, green, white, pink, brown, black, gray と、その組み合わせでできる色をテーマに授業した。この授業は、テキスト「小学校ならではの英語活動」中の活動例⁶⁾を参考した。はじめの学習活動では、JTが色カードを見せながら、基本「色」を英語発音で紹介し、児童は発音を反復練習した。さらに色の復習では、何色のカードが無くなったか当てるミッシングゲームや、自分の周りの色に触るタッチ・タッチゲームを楽しんだ。

第二の学習活動であるグループ活動では、絵の具の2色の色水をペットボトルを使って実際に混合し、その色の変化を見て、各グループの児童がその変化の経過を英語で、例えば、Blue plus red. It's purple. と発表した。「少量」を意味するa bit ofの言い方を、児童に動作をつけて紹介したところ、言葉の響きと動作が面白かったようで、児童同士で何度も連呼していた。あるグループがa bit of blackを使って発表した際には、クラスのあちこちから、まるで楽しい呪文を唱えるかのような発声が聞こえた。A bit ofが学習を通して、偶発的な言葉となった。また、別のグループの作った色が抹茶色になった時には、抹茶色は日本古来の色だが、英語でもmatchaと言って、外国では飲み物やアイスクリーム名としてよく知られているとJTが伝えたところ、身近な日本語が外国でも使われていることに驚いていた。次に、それらのグループ発表をもとに、各自「色の足し算プリント」を完成させた。また、最後に作っ

2年生 CLIL 授業

授業回数	Content	Communication	Cognition	Community/Culture
第1回	図画工作 色の組み合わせ 色水で調べてみよう。	学習言語 色の名前 What color is it? 学習のための言語 pour/shake/mix What is missing? Show us. A bit of ~.	学習言語・色の名前を様々な練習活動通して知る。絵の具を使って色水を作り、混ぜ合わせて目標の色を作る。	グループで協力して目標の色を作る。色の足し算で、作った色をクラスで紹介する。全部の色を混ぜたら何色になるか考える。外国でも有名な日本古来の色 match (抹茶) について知る。
第2回	図画工作 色の足し算をプリントでまとめてみよう。絵本を楽しもう。	学習言語 色の名前 学習のための言語 Snowman/hungry など絵本の言葉・表現に慣れ親しむ。	発表を思い出しながら色の足し算をまとめる。絵本の中で色の足し算をする。	全員が色の足し算プリントを完成させる。日本と外国の雪だるまの違いを知る。

た全部の「色水」を一つのバケツに入れ、何色になるか皆で予想してみた。多数の児童がBlackと予想したが、混合の結果はココアのような色となった。

2時間目は「色の組み合わせ」を使った創作絵本、*The hungry snowmen*を、校長先生・担任教師・JT3名が英語で紹介した。お腹をすかせた雪だるまが、冷蔵庫にある物を食べていくたび身体がその食べ物物の「色」に変わっていく様子に、子供たちは、次は何色になるのか、どんな食べ物かを想像し、予想を英語で発音しながら見入っていた。絵本紹介後の「クイズコーナー」では、簡単な英語で絵本の内容を児童へ質問しながら、授業の振り返りを行い、終了した。

2-3. 3年生 算数（1クラス35名）「算数の足し算・引き算—1から10までの英語を使って」

平成28年11月4日2限目に授業を実施した。担任教師とJT中山によるチーム・ティーチングで行った。

3年生では、数字の1～10までの英語を使用した「算数の足し算・引き算」を行った。内容は単純な1年生の「算数の足し算・引き算」である。児童は1～10までを英語で連続して言うことはできるが、数字を個別の単語として、例えばsix、eightと一つ一つ別々に質問されると、問われた数字をoneから数えなおして確認する児童の姿がよく見られた。そこで始めに、英語で1から10までの英単語の意味を記憶させるための反復発声練習を行った。練習方法としては、児童を2グループに分けて数字を交互に数えさせた。この時、1) 連続した二つの数字を2グループで交互に数える；2) 逆から数える；3) バラバラに配列した数字を数える⁷⁾などの工夫をし

た。さらに、担任教師が児童の理解度を確認するため、下記の2種類のゲームを行った。

(Numbers game) Let's do the numbers game. We use the fingers. When I say "one", show me one finger. When I say five, show me five fingers.

(Lucky seven game) Make pairs. Show me your right fingers. Only use the numbers of two, three, four, and five. Try to make the numbers of seven with your partner saying "Lucky seven".

これらのゲームは、児童が隣同士簡単に、しかも短時間で行うことができるペア活動である。全体活動やグループ活動時よりも教師は子供たちをよく観察でき、次の学習活動に移るタイミングを計りやすくなる。

次の学習活動として、児童が個別で行う算数用の解答用紙を配布、担任教師が質問した。

問1：児童は担任教師が英語で言った数字を聞いて、その数字を解答用紙に記入。

問2：算数の足し算、引き算の計算、例えば、「□+□=8」の問いに、1+7、2+5、3+4、7+1、5+2、4+3の6通りの答えを考えて一つ書き、英語で発声する。

問3：解答用紙に描かれた複数の絵を組み合わせ、物の数え方を完成する。JTによる英語と身振りでの問題説明を受け、児童はその内容を類推し、解答用紙中にある数字や絵をスペース内に当てはめる。

問4：長い足し算に挑戦し、解き方の法則を見つける。

解答の際の傾向として、問2では積極的に答える児童が多数見られた。これは、問2の足し算・引き算は答えが6通りもあったので、色々な答え方が可能であったためと考えられる。問3の応用問題は、JTがゆっくりと絵を示しながら問題の説明を英語

3年生 CLIL 授業活動

授業回数	Content	Communication	Cognition	Community/Culture
第1回	算数 足し算・引き算 1～10の数を使って	学習言語 1～10の数 plus/minus 学習のための言語 Numbers How many ～?	学習言語 1～10の数え方を全体活動—グループ活動—ペア活動—個別活動を通して定着させる。	日本と外国の足し算・引き算のやり方の違いを知る。

で何度か行った。その際、内容を類推できた児童、個々に説明されてなんとなく類推できた児童、担任教師から日本語で説明されてもなかなか理解できなかった児童に大別された。そのため、学習活動進行の速度が異なってしまう、授業時間内に解答しきれない児童が過半数以上だった。問4まで到達し解答できた児童はクラスの中で2～3名だけだったが、その中である男子児童が足し算の法則を見つけ、授業後に担任教師を巻き込んで、その簡単に計算できる方法を皆に説明している場面が、たいへん印象に残った。(英語で数式を表現したので考える力を刺激し、5年時の問題も解答できた可能性も考えられた。)全体を通してほとんどの児童は、英数字による単純な計算は積極的に答えられたが、問3のような文章問題の場合は内容が極めて簡単であっても、英語が入ってきたとたんに拒否してしまう児童も見受けられた。

2-4. 4年生 理科 (2クラス:23名ずつ)「植物の部位・野菜の仲間 どこを食べているの？」

1回目の授業として平成28年10月19日2限目に第一クラス、10月27日2限目に第二クラス、2回目の授業として11月11日2限目に第一クラス、11月17日2限目に第二クラスで授業を実施した。担任教師とJT中山によるチーム・ティーチングで行っ

た。4年生の理科の通常授業では、1学期に「ヘチマを育て観察する」を行った。今回はその続きとして「植物」をテーマにCLILを使った授業を行った。テキスト『ストーリーと活動を中心にした小学校英語』の中の「植物の部位・野菜の仲間⁸⁾」を応用して授業プランを立てた。はじめに野菜の名前を英語で紹介し、その発音練習をした。第1の学習活動として23種類の野菜が描かれたワークシート①を使って、自分の好きな野菜・嫌いな野菜をI like ～. I don't like ～. の言い方へ適用し、児童同士で自分の好みを紹介し合った。しかし、シートに提示された野菜の種類が多いため、児童は好きなもの・嫌いなものという二択の選択が難しく、「好きでも嫌いでもない場合は?」「食べたことがない場合は?」と考えこんでしまい、隣同士、積極的な対話ができない様子であった。また、英語に対して極端に苦手意識をもつ児童がいたこともあり、時間をもて余しているようだった。

授業の流れを変えるため、JTは児童4人を1グループにさせ、指定された23種以外の知っている野菜を日本語で挙げさせ、ワークシートの裏にそれらを書いていく学習活動を行わせたところ、児童は集中し書き込むようになった。その後一人ずつ記入した野菜の名前を発表させ、担任教師がその野菜の名前を黒板に列記していったところ、児童からは競うようにたくさんの手が上がった。注目に値するの

4年生 CLIL 授業活動

授業回数	content	Communication	Cognition	Community/Culture
第1回	理科 野菜の名前を知る。植物の部位を知り、野菜のどの部分を食べているのかを考える。	学習言語 vegetables/root/ leaves/fruit/stems 野菜の名前 学習のための言語 I like ～. I don't like ～.	学習言語を暗記・理解する。 根・実・茎・葉のどの部位を食べているかを、野菜料理を思い浮かべ、分類する。	どんな野菜を知っているかグループで名前を出し合い、各自発表する。 野菜のどの部位を食べるかをグループで考え分類してみる。
第2回	理科 好きな野菜について、パソコンを使って調べ、成長の様子をみる。	学習言語 野菜の名 vegetables/root/ leaves fruit/(stems) 学習のための言語 This is ～. We eat ～. The answer is ～.	パソコンで自分の好きな野菜について各自で調べ学習をする。クイズの内容をパソコンを使って調べ、回答する。	各自が好きな野菜の名前と、どこの部位を食べるか皆の前で説明する。クイズの回答をパソコンで調べ、それを皆で共有する。

は、英語に苦手意識があったある児童は、英語で野菜の好みを述べさせる前半の授業中はほとんど無言だったが、知っている野菜名の発表では、(日本語ではあるが)一番多くの名前を挙げ、皆からは称賛の声が上がった。これがその児童の自信につながり授業への意識が変わり始めた。冬瓜、小松菜、ミョウガ、パクチー、竹の子など、他の児童からもかなり多くの野菜の名前が出てきたことに驚いた。と同時に、ほぼ全員が家庭では季節ごとに色々な野菜を食べていることが分かり、安心させられた。家庭科的要素が入った寄り道作業のおかげで、ワークシート①の「自分の好きな野菜を描く」の欄に、それぞれが思い思いの野菜を描くことができ、先ほどの児童を含め、授業を楽しんでいる様子が十分に感じられた。

第2の学習活動として、植物の部位 root, fruit, leaves, flower が描かれたワークシート②を配布。その中で、よく知られている9つの野菜の名前 cabbage, potato, turnip, pumpkin, carrot, tomato, lettuce, eggplant, spinach を JT が英語で紹介し、児童は発音練習した。続いて植物の部位 root, fruit, leaves, flower が描かれたポスターを黒板に提示し、植物の部位について JT が英語で説明を行い、次に英語の発音が苦手な児童たちに配慮し、担任教師による日本語での簡単な説明が行われた。再び4人1グループになり、紹介した9つの野菜について、root, leaves, fruit のどの部位を食べているのかを考え、シートに記入させた。全員でその正答(下記)を確認し、1回目の授業を終了した。

root—potato/turnip/carrot

leaves—cabbage/lettuce/spinach

fruit—pumpkin/tomato/eggplant

2回目の授業は、コンピュータールームで担任教師・JT とアシスタント JT の3名によって行われた。パソコンを使って「好きな野菜について、どここの部位を食べるのか調べてみよう。栽培の様子を見てみよう」をテーマに、各自で調べ学習を行った。まず全員で「野菜のひみつ 食べているのはどの部分？」ホームページ⁹⁾から、「調べたい野菜が土からどのようにできているのか、どの部分を食べているのか」を調べた。その後のクイズタイムでは、「スイカ・メロン・イチゴは野菜でしょうか。アボカドはどう

でしょう。」のクイズの解答を Yahoo kids 「スイカ イチゴ メロンは野菜か果物か」・「アボカドは野菜か果物か」のホームページ¹⁰⁾から調べさせた。さらに担任教師から「スイカ・メロン・イチゴは野菜で、アボカドは果物」になる理科的意味付けを、「茎やつるなどの草本性植物を野菜、樹木になるものを果物と呼ぶ」と追加説明があり、授業は終了した。この授業において、授業構成のために注意しなければならない事柄が見えてきた。パソコンのトラブルで、1クラスの授業時間を短縮せざるを得なかった。また、パソコン作業では、児童の日常的な使用頻度の差が今回の調べ学習に大きく影響した。加えて1・2回目の授業間隔が長かったため、1回目授業での学習内容の記憶が2回目では曖昧になっていた。このように機械の意図しないトラブルの可能性等も含め、時間設定や授業日程を熟考した指導計画が今後の課題として残った。



2-5. 5年生 社会(1クラス36名)「世界の国の国土面積を調べよう。日本と比べてみよう。」

1回目は平成28年9月29日3限目に、2回目は10月20日3限にCLILを使った授業を実施した。担任教師とJT中山によるチーム・ティーチングで行ったが、1回目授業では4名の見学の先生方が授業の一部で補助者として参加した。

5年生の1時間目には、地図帳を使って世界の国の国土面積を調べた。まず地図帳を使って国土面積一位がロシアと確認した。その国土面積の半分の値を、全員に一台ずつ用意した電卓を使って計算した。次に、その値に近い国土面積をもつ国をブラジ

ルと確認し、引き続きロシアの4分の一の値、その16分の一、32分の一、64分の一の値を、順に電卓で計算し、得られた値と最も近い値をもつ国土面積の国を、地図帳で調べていった。ロシア国土面積の45分の一の値である日本の面積も調べ、調べた数値をワークシートに各自書き込んだ。今回の授業では、特に論理的思考を含む難しい学習内容を児童にどう英語で伝えるかを工夫した。学習言語country, land area, a half, a quarter, an eighth, a sixteenth, a thirty-second, a sixty-fourth, km²を1枚ずつカードにして黑板に貼り、カードの英語がJTの説明の中で出てくるたびに、その英単語カードを指し示し理解を促した。また、JTはよく使う動詞、例えばcalculate, writeなどや、形容詞the biggest, the smallestが出て来た時には、必ず動作で児童に示した。英語での説明を耳だけで覚えるのではなく、英単語カードを示す・動作で示すなど、視覚的な記憶と連結するよう意識した。すると、児童は授業が進むにつれ、徐々に内容が理解できるようになっていった。そのことを示すように、後半には上述の英単語をJTの説明するたびに、児童も一緒にになり、その意味を日本語で繰り返すようになった。論理的思考を含む英語学習内容でも、視覚的認識を発音に加味することは効果的であった。しかしながら、ワークシートの内容については、どのように簡略化を進めるかが、今後の検討課題となった。例えば、扱う数値の単位があまりにも大きいため、担任教師の日

本語での指示が伝わらない児童もあり、急遽、先生方4名が補助者として対応に加わった。最後に「世界で一番国土面積の小さい国は？」のクイズに児童1名がバチカンと回答。他の児童はその国がどれだけ小さいか理解できない様子であったが、担任教師が東京ディズニーランドと同じ大きさと例を挙げて伝えたところ、皆が自発的に地図帳で調べ始めた。JTが探すための二つのヒントを英語で与え、全員で場所確認をして授業を終了した。

2回目の授業では、始めに前回黑板に貼った英単語カード（学習言語）の確認を全員で行った。次に児童は4つのグループに分かれ、「国土面積の大きさの違いを新聞紙を使って体験的に理解する」をテーマに学習活動を行った。大きく広げた2面分の新聞紙を国土面積1位のロシアに見立て、その上に何人立てるか・座れるかに挑戦した。次にロシアの2分の一の値の国土面積であるブラジルを新聞紙1面に見立て、同じように挑戦した。ロシアの4分の一、8分の一と、新聞紙を折り進めながら同じように作業を進めていった。作業の最後に、比例計算して日本の国土面積とほぼ同じ大きさとなる新聞紙を用意した。1位ロシアは7～9人の児童が新聞紙の上に両足で立てられるのに対し、日本は一人が片足で何とか立っていられるぐらい、とても小さなものであった。その後、作業を通して気が付いたことをグループ内で話し合い、グループの代表者が発表して授業が終了した。その発表から、授業を受け

5年生 CLIL 授業活動

授業回数	content	Communication	Cognition	Community/Culture
第1回	社会科 世界の国々の国土面積 や場所を調べる。	学習言語 国の名前、分数の 言い方、country/land area 学習のための言語 数の言い方 write/calculate the world map the biggest	学習言語及び学習のた めの言語を使った説明 を理解し、ワークシ ートを行う。	地図帳を使って色々な国の場所 や国土面積を調べる。調べ学習 したワークシートの内容を皆で 確認する。
第2回	社会科 新聞紙を使って世界の 国々の大きさの違いを 知る。	学習言語 国の名前、分数の 言い方、country/land area 学習のための言語 newspaper/the world/the smallest How many ~ ? How about ~ ?	学習言語及び学習のた めの言語を使った説明 を理解し、グループで 活動を実践する。	調べた事を元にグループで実践 活動を行う。世界の国々と日本 との大きさの違いを知る。活動 を通して気が付いたことを話し 合い、グループごと発表する。

た児童たちは世界の事情にほとんど関心がなかったようで、この学習活動を通して感じて欲しかった世界の国々の社会的問題はごく一部の数人の児童にしか伝わっていなかった。社会の通常授業を通して、世界の国々の関係や事情についての予備知識の充実があればと感じられた。



2-6. 6年生 社会科（1クラス36名）「日本の都道府県について・ご当地のものを調べて発表しよう・修学旅行で愛知県を外国人に紹介しよう。」

1回目の授業は平成28年10月20日4限目に、2回目の授業は11月10日・11日の修学旅行時に置き換

えた。29年1月19日4限に3回目の授業、2月2日5限目に調べ学習と発表用シート作成の時間とした。2月16日の5限目の授業参観日に5回目の授業を実施した。担任教師とJT中山によるチーム・ティーチングで行った。担当しているD小学校では国際理解教育の一環として、数年前より6年生の修学旅行時に外国人へのインタビュー活動を取り入れている。その際、自分たちの住んでいる愛知県のことも英語で紹介している。そこで、1回目の授業では、インタビューする内容をクラス全員で話し合い、JTがそれを英語に直し、さらに愛知県の紹介も加えたインタビュー内容の練習を行い、終了した。その後、朝のホームルーム等を使って修学旅行当日まで担任教師と児童が何度もインタビュー内容の練習を行った。

修学旅行を終えてからの3回目の授業では、47都道府県の名前をへボン式ローマ字で紹介。児童はペアになり、自分たちの住んでみたい都道府県を選び、そこに住んでいると仮定して黒板に貼った大きな日本地図で場所を示しながらクラス全体に、We live in ～. と紹介をした。次に各児童が一つ担当する都道府県を決め、授業を終了した。4回目の授業では、担当する都道府県のご当地のものを2～3つパソコ

6年生 CLIL 授業活動

授業回数	Content	Communication	Cognition	Community/Culture
第1回 第2回	社会科 (国際理解) 修学旅行で外国人にインタビューする。英語で愛知県を紹介する。	学習言語 インタビュー内容、 愛知県の紹介内容。 学習のための言語 Excuse me./Hello/ Thank you./Good-bye./This is for you./Have a good day.	学習言語の内容及び学習のための言語を練習し、それを実践する。	グループで、京都を訪れている外国人に英語でインタビューをする。自分たちの住む愛知県を英語で紹介する。自分たちの作った折り紙を、インタビューのお礼に外国人に渡す。
第3回 第4回	社会科 都道府県のご当地のものを調べる。	学習言語 This is ～. It's famous for ～ 学習のための言語 都道府県名 Where do you live? /I live in ～. ご当地チャンツ	学習のための言語の練習。学習言語を使っ ての発表の準備・練習する。	学習のための言語を使っ てのペア活動を行う。各児童が担当する都道府県を各自でパソコンや本で調べ、発表シートを全員が完成させる。
第5回	社会科 担当した都道府県のご当地のものを各自が調べて紹介する。	学習言語 This is ～. It's famous for ～ 学習のための言語 都道府県名 Hello/I'm ～. Thank you.	学習言語を使って、各自で調べてまとめたことを紹介する。	参観日に、各自調べてまとめたもの を示しながら、一人ずつ発表する。

ンや本などを使って調べ、参観日に向けての発表用シートを作成した。5回目の参観日の授業では、全員が担当した県について発表した。プロジェクターを使って拡大された発表用シートを提示しながら、修学旅行時の英語インタビューの際に練習したご当地チャンツ This is Aichi. It's famous for Nagoya Castle, Toyota, and Tebasaki.¹¹⁾ を参考に行った。今回のCLILを使った授業では、クラスに在籍する帰国子女や英語を得意とする児童数名が、修学旅行の際、率先して外国人にインタビューをしていた。他の児童にとって、その場で使う英語を実感し刺激を受け、それが修学旅行時の自発的なコミュニケーション活動につながった。また、参観日では発表内容を自分なりに膨らませ、素晴らしい発表を見せてくれた児童が何人かいた。彼らの堂々とした姿勢はクラスの雰囲気を変え、ともすれば恥ずかしいと思ってしまう年齢の児童たち全体の活動を向上させる役割を担ってくれた。

3. 成果と課題

実践授業で見られたように、視聴覚的に児童の好奇心や想像力を沸き立たせる授業内容、またテーマとなる物に直接触れ、その物を使っての実験、図画作成など、実物を体験する授業は、日常の英語活動(LEE TIME)よりも有意義で、児童中心の活発な授業が行えたという手ごたえを十分に感じた。これまで英語に触れる機会が少ない小学校低学年だが、授業を通して出てくる偶発的な言葉、すなわち「学習を通しての言語」が何度も発せられ、興味関心が惹かれることに対しては、日本語・英語の言語の垣根を越えた学習が成立することが分かった。しかしながら、中学年・高学年は、英語に苦手意識がある児童が低学年に比べて多いことが、学習のマイナス要因として懸念された。今後の授業では、児童に与えている認知的負荷(英語での分析的思考の要求)に配慮した学習や活動を改めて見直す必要があると考えられる。今回の実践では、授業回数の少ない低中学年においてはLight CLILを行ったが、高学年5・6年生に対しては、英語での論理的思考を必要とするHeavy CLILを使った授業を行った。6年生では授業時間(5時間)が十分にあったので、主体的・対

話的で深い学びの実現であるアクティブ ラーニングをある程度達成できたが、5年生は低学年と同じ授業数(2時間)であったため不十分な理解であったと感じた。そこで5年生にも英語での論理的思考を求めるためには、十分な授業時間数の確保が不可欠だと結論づけられた。また、授業でのCLIL実践は、全学年とも英語と日本語を使用するBilingual CLIL形式としたが、中学年3・4年生では、教師と児童が英語で話す時間に比べて日本語で話す時間の比率が多かった。CLILを使った授業では児童の英語での言語活動を促進させるためには、「4つのC」の一つであるcommunicationのための3つの言語、language of learning(学習の言語)、language for learning(学習のための言語)、language through learning(学習を通しての言語)が重要であると説かれている¹²⁾。今後の授業では、この3つの言語をさらに意識した授業を展開させていく必要があると認識した。この反省点を生かし、現在実践中の平成29年度CLIL授業においても、学年に応じた効果的学習のために指導プランを修正したい。特に5年生では認知的負荷を軽減するCLIL授業を行いたいと考える。

謝辞

この実践活動は、A市教育委員会の「創造と活力のある学校づくりの推進」プログラムから国際理解教育の中の一部助成を受け、A市立D小学校岡崎校長先生(平成28年度退職)はじめ諸先生方、LEE TIMEメンバーである佐藤美穂さん・下田真理子さんの協力を得て実施した。

参考文献・引用文献

- 1) CLIL in Japan for Primary Education, *CLIL Japan Primary*,
<http://www.primary.cliljapan.org/what-is-clil/> 2017年8月27日取得
 文部科学省(2017).『小学校学習指導要領解説 外国語編:第1章総説 1. 改定の経緯及び基本方針』.(p3)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFils/afieldfa/2017/06/21/1387017_13_1.pdf

- 2) Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge University Press
池田真. (2011). 「第1章 CLIL の基本原理」渡部良典・池田真・泉伸一一(共書). 『CLIL(内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』. (p1-13), 東京: 上智大学出版.
- 3) Coyle, D. (2007). Content and language integrated learning: Towards a connected research for agenda for CLIL pedagogies. *The international Journal of CLIL Bilingual Education and Bilingualism*, 10, 543-562
池田真. (2011). 「第1章 CLIL の基本原理」渡部良典・池田真・泉伸一一(共書). 『CLIL(内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』 (p1-13), 東京: 上智大学出版.
Mehisto, P., D., & Frigols, M. (2008). *Uncovering CLIL: Content and language integrated learning in bilingual and multilingual education* Oxford: Macmillan.
- 4) 池田真. (2011). 「第1章 CLIL の基本原理」渡部良典・池田真・泉伸一一(共書). 『CLIL(内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』 (p10), 東京: 上智大学出版.
- 5) CLIL in Japan for Primary Education, *CLIL Japan Primary*,
<http://www.primary.cliljapan.org/what-is-clil/> 2017 年 8 月 27 日取得
文部科学省. (2017). 『小学校学習指導要領解説 外国語編: 第1章総説 1. 改定の経緯及び基本方針』. (p8-10), Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFils/afieldfail/2017/06/21/1387017_13_1.pdf
文部科学省. (2010). 『小学校外国語活動研修ガイドブック』. (p44), 旺文社.
- 6) 宗誠・松川玲子 (監修). (2007). 『小学校ならではの英語活動～国際コミュニケーションの素地をつくる～第7章』. (p128), 文溪堂
- 7) 樋口忠彦(代表)大城賢・國方太司・高橋一幸. (2010). 『小学校英語教育の展開—よりよい英語活動への提言—』. (p102), 研究社.
- 8) アレン玉井光江. (2011). 『ストーリーと活動を中心にした小学校英語』. (p36-42), 小学館集英社プロダクション.
- 9) 「野菜のひみつ 食べているのはどの部分?」. Yahoo kids. Retrieved from <https://vegetable.alic.go.jp/yasainohimitu/bubun/bubun.htm>
- 10) 「スイカ イチゴ メロンは野菜か果物か」. オホーツク総合振興局.
Retrieved from <https://www.okhotsk.pref.hokkaido.lg.jp>
「アボカドは野菜か果物か」 yahoo 知恵袋. Retrieved from https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jpqa/question_detail/q10609230?_
- 11) mpi. (2014). 『Japan チャンツ』. (p2-5), 日進印刷株式会社
- 12) Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge University Press. p60
山野由紀. (2013). 『小学校外国語活動における内容言語統合型学習 (CLIL) の実践と可能性』. Eiken Bulletin = 「英検」研究助成報告/日本英語検定協会編. 東京: 日本英語検定協会、2013-
アレン玉井光江. (2016). 『内容を重視した外国語教授法 —CBI と CLIL—*Foreign Language Instruction Integrating Language Teaching and Content Teaching: CBI and CLIL*』. 青山学院大学. Retrieved from http://www.arcle.jp/research/books/data/html/data/pdf/vol10_4-2.pdf

受付日 2017年 9月29日

受理日 2017年11月 9日